



Title	<図書紹介>『夏目漱石を江戸から読む』
Author(s)	御薬, 袋充
Citation	大阪大学言語文化学. 1997, 6, p. 190-193
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78101
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

図書紹介

ここでは、言語文化学会会員が出版に関して大きく関わった図書の紹介をいたします。

小谷野敦著 『夏目漱石を江戸から読む』 中公新書 1995年 231頁 ISBN 4-12-101233-X 720円

このタイトル、似たような名前の本はなかったかなと思いながら読み始めると、その疑問はすぐに「はしがき」で明らかにされる。野口武彦氏の『「源氏物語」を江戸から読む』に習い、著者は自らを落語家になぞらえて「漱石」と「江戸」という二つのお題で何かを語れないかという。とはいえ、嘶家に与えられるお題は三つが基本である。明晰な小谷野氏は、ただ漫然と夏目漱石の小説と江戸文学とを比較して済ませはしない。「漱石」と「江戸」を貫く軸となる3つ目のキーワードは何か。それは副題につけられた「新しい女と古い男」からもわかるように「恋愛」であり、より正確に言えば近代日本における「恋愛」をめぐる言説の自明性を批判することが、近年小谷野氏の追求しているテーマである。

ここでいう「江戸」、「漱石を江戸から読む」著者にとっての「江戸」とはなにか。それは漱石夏目金之介が生まれた東京＝江戸のことでもあれば、徳川時代の「江戸」のことでもある。恋愛小説としては不完全だとも評される漱石の作品群を今一度日本文学史の中に位置付けたとき、そう遠い昔でもない江戸期の浄瑠璃や歌舞伎、人情本や読本（馬琴の没年と漱石の生年の間は二十年もない）とどのような関係が測定できるのか探ってみることが著者のねらいといえよう。

ところで夏目漱石の小説は不完全な推理小説でもある。というのは、作品の最後に真相が明らかにされず、また真相＝結末の究明や犯人の特定に不可欠な手掛かりさえすべては読者に与えられないまま小説が終わるからである。つまり、特定の解を求めるには式の数が不足している多元連立方程式を解くようなもので、漱石の読者は限られた状況証拠だけを元に推測するしかない。漱石の作品の中の謎、例えば『三四郎』において里見美禰子は本当は誰のことを愛していたのか、『行人』ではお直は夫一郎の第二郎に気があったのか、『こころ』ではお嬢さん＝静は「先生」とKのどちらを気に入っていたのか、そして静とその母はKの自殺の動機知っていたのか、等々。それに『それから』や『明暗』における主人公の

男女の行く末や如何に、といったところだろうか。真相を特定する材料が不足している以上は複数の答えが推測され得るにとどまるはずだが、芥川龍之介の「藪の中」の解釈にしてもそうなのだけれども、事が男と女の関係、恋愛沙汰になると不思議に議論が妙な熱気を帯びて特定の方向へと収斂していくようだ。「男と女はかくあるべし」という固定観念のために、いかに文学の解釈が不自由なものになっているか、近世日本文学や西洋文学における豊富な恋愛像を援用する著者に導かれて、われわれのもつステロタイプの恋愛観が相対化されていくプロセスはとても清々しく感じられる（もっともその清々しさは、また別の苦々しさにとってかわられるともいえるのだけれども）。本書は『坊ちゃん』『虞美人草』『三四郎』『それから』『行人』『ころも』『明暗』の七作を検討する七章構成をとっているが、ここでは特に興味深いと思われる箇所をピックアップして紹介したい。第一章『『坊ちゃん』の系譜学』では、読者が明治維新という近代と近世の壁を乗り越えるために、主人公坊ちゃんのアイデンティティにまつわる謎が提示される。自称「江戸っ子」の主人公は本当に「江戸っ子」なのか。「江戸っ子」の明確な定義は非常に難しいのだが、宵越しの金は持たず、喧嘩早いのが恨みは後に残さず、人情に厚くていきを尊ぶのが江戸っ子なら、兄から渡された六百円を三年分の学資として計画的に用い、宿屋で茶代を奮発しては後悔し、山嵐におごられた氷水代のたった一銭五厘にもこだわるのははたして江戸っ子の金銭感覚か。天麩羅蕎麦や団子食って生徒にからかわれては逆上し、宿直室にバツタをほうり込まれては幾晩泊まり込んででも報復を果たそうとする執念深さは野暮の骨頂ではないだろうか。そもそも「これでも元は旗本だ」という源満仲の子孫に江戸っ子を名乗る資格はあったのだろうか。戊辰戦争では佐幕派であった会津の出身である僚友山嵐とともに、武士精神を尊び、公正を重んじる坊ちゃん。著者は「多田満仲」という歴史的固有名に導かれて『南総里見八犬伝』と「公平浄瑠璃」を援用しつつ、坊ちゃんと山嵐に、共同体としての江戸＝東京が成立する以前の戦国武士と幕末の志士の姿を重ね合わせる。彼らこそは千年王国を夢見つつも、その夢破れさって時代とともに消えていく人々ではなかったか。大人になれない『坊ちゃん』とは夢を求めて可能性の中にのみ生き、現実には敗北していく人々への挽歌なのである。

けれどもそれだけでは終わらないのが『坊ちゃん』である。単なる痛快な反＝共同体小説を装ったこの小説の中にも、漱石が『我輩は猫である』から『明暗』まで一貫して表出しているモチーフが読み取れる。それは「恋愛において男の思

いをよそに自ら添うべき男を選択して行動する女」あるいは「誰をも愛そうとしない女」への嫌悪である。『坊ちゃん』では、それは「聖人」うらなり＝古賀を袖にして赤シャツと一緒にマドンナへの坊ちゃんの悪態として描かれている。これを承けて第二章以降に漱石の代表的な長編小説の中の「女性嫌悪」表出が読み込まれていく。

第三章「女性嫌悪の中の『恋愛』——『三四郎』」では、著者はナイーブな三四郎とやり手の美禰子という従来の解釈を覆す。地方出身の純朴な青年三四郎は東京の様々な男女と交流することで感情教育を受けるのではない、三四郎は鈍感な田舎者でもなんでもなく、いささか慎重ではありすぎるが、いかにして自分を危機に陥らせずに女性を引きつけるかに腐心しているのだ、と著者は主張する。結果的には三四郎は名古屋で途中下車した旅の女とも里見美禰子とも結ばれることはないのだが、それを「駆け引きが下手」と評する他の『三四郎』論者の発想そのものを著者は批判する。そういった発想には、論者の意図するしないにかかわらず「女性は征服すべし、据え膳食わぬは武士の恥」というメタメッセージが込められているからである。また、「美禰子は三四郎を愛していた」と主張する小宮豊隆以来の「通説」をナイーブなものとし「美禰子は誰を愛していたのか？」と問いなおす近年の論者も批判される。そもそも美禰子が誰を愛していたのかと問う読者自身が、美禰子を取り巻く男たちともども、自分が屈することなく女性と結ばれたい＝女性に従わせたいという男性優位の願望に捕らわれているのだから。例えば、明治期の社会経済的環境に着目して、男性に従属せずには生きていけない美禰子を周囲の男性は理解できなかったのだという小森陽一氏の「穏当な」解釈¹¹に対して、小谷野氏はそうではなくあの男たちは端から理解する気すらなかったのだという。彼らには男の精神的優位を覆す女性——それは彼女が「奔放」だからなのではなく、単なる「他者」であるからなのだが——に対する根強い嫌悪と恐怖があった。その意識を現代の読者（特に男性）も共有していないとは誰が断言できるだろうか。こうして後代の解釈とともに『三四郎』というテキストの中の女性嫌悪は増幅されていくのである。

それから最後に『『こころ』は「同性愛小説」か?』といういささか刺激的な章題を持つ第六章に触れておきたい。精神病理学者土井健郎と作家橋本治は、それぞれ『こころ』における「同性愛的」ないし「ホモ小説」的要素を指摘してい

¹¹ 小森陽一『漱石を読みなおす』ちくま新書 1995

るが、厳密を期するならば、彼らの言わんとするところは「ゲイ小説」と呼ばれるべきであろう。そのことを踏まえた上で、この章では後に引用されるイヴ・コゾフスキー・セジウィックが提唱したホモソーシャル／ホモセクシュアルの概念の区別に是非とも留意しなければならない²⁾。セジウィック／著者によれば古今東西におけるホモセクシュアリティを扱った文学はそのほとんどが、女性嫌悪に基づいた男性同性愛、ゲイ文学であった。そしてそれらの言説は、子孫（男）の再生産を目的とした女性とのセックスを肯定するにもかかわらず、男性の高貴さ・優位性を乱すものとしての異性愛を貶め、より強固な結び付きを誇る男色を擁護するものであった。セジウィックは、そういった関係性をホモセクシュアルとは呼ばず、ヘテロセクシュアル／ホモソーシャルと呼ぶ。プラトンの対話編や近世日本の野傾論における男色女色優劣論争は、女性に子供を産ませる事を前提とした、仕手（たち）の立場にある成年男子のみが構成するすぐれてホモソーシャルな言説である（『我輩は猫である』の迷亭の「独身主義」を見よ）。遺産相続に伴って『ころ』の先生が抱く人間関係への不信とは、いかにして柔順で財産を掠め取りそうもない女性に男子を産ませ、地位・財産を継承させるかという問題にかかっている。ホモソーシャルな男性社会には女性嫌悪と同性愛恐怖が不可避であり、そこに欠けているのは犯／侵される立場の女性／受けの弱き男性—あるいは単なる他者—への洞察が欠けている。

ある種のフェミニズム批評は、ヴィクトリア朝からウーマン・リブ以前の合衆国に至るまでの女性蔑視の裏返しとしてのロマンティック・ラヴ・イデオロギー／レディー・ファーストを批判しているが、それらの批評は、第三章で明かなとおり、依然として「女に頭を下げることを嫌がる」ホモ・ソーシャルな日本人男性を狙っても撃ち損じてしまいかねない。まず男性も自然に女性に「頭を下げる」ような環境を実現すること、そうしてから人が人に服従せざるをえない社会そのものを変えること。日本の社会ではフェミニズム／ジェンダー批評はいまだ「一人二役」を強いられる運命にあるようだ。（御葉袋充³⁾）

²⁾ Eve Kosofsky Sedgwick, *Between Men : English Literature and Male Homosexual Desire*, Columbia UP, 1985

³⁾ 言語文化研究科博士前期課程